

北社会ニュース 第41号

2008年3月18日

発行者：鈴木壮夫

昨日の夕刊各紙の一面トップ記事は「円高加速95円台」「東証1万2000円割れ」であった。米国のサブプライムローンのローン債券を複雑に組み込んで証券化した金融商品は、高利回りが狙える投資として世界中にばらまかれていたらしい。それが、ローンの焦げ付きで証券価格が暴落、値段がつかなくなり、動揺が世界中に拡大しているとの大筋は理解できているが、“ドルの揺らぎ”に日本の庶民生活にも大きな影響を受け始めたことを実感させられている。

今年に入って、10年目の私のそば屋も野菜の値上がりが目立つ程度だが先行きの不透明感には覚悟させられている。でも、立ち上げ時の「素人の身の丈・身の幅をきちんと守り続け、謙虚に店を守っていくしか生き残る道は他にない」という覚悟を思い出す昨今です。難しい局面に立ち向かっていくのも、やりがいがあると自らを鼓舞し、自分がどんなに“微細”であろうと社会の影響下から逃れられないんだと、それなら戦うぞ！とまあ・・・大袈裟ですがこんな日々を過ごしています。しかし、カネに振り回される人々、何時の時代も歴史は繰り返すですね。

(1) 今春の母校の入学者：女子96名、男子224名 合計320名

先週12日、一般入試の合格者が発表され、既に決定していた推薦入試合格者と合わせ共学化二年目の男女生徒数は上記の通りとなった。初年度の昨年は女子70名だったので26名増加し、全体に占める比率は30%となった。根拠は定かではないが、受験する中学側、受け入れる高校側で、二高が共学になったら女子の比率は30%程度と推定する意見が多かったという。二年目で早くも一つの枠ができあがったが、女子中学生の二高生願望には驚かされた。3対7でも、オンナに負けちゃうんじゃないかなあ・・・と心配。

今月28日、定年で二高校長を退職される柏葉校長先生に電話して三年間のご苦勞に御礼をお伝えしました。国立大学の前期日程合格発表の翌々日だったので、東北大・合格者数が話題の中心になりました。今年は120名合格で而も現役の比率が高く、生徒達はよく頑張って近年にない好成绩だと話されておりました。(同窓会報によると過去三年間の東北大合格者数は86-103-104)。高校生活にとって大学進学だけが全てではないが、柏葉校長先生の生徒との一体感、生徒のやる気を引き出した環境作り、共学化という難しい時期に素晴らしい校長先生に巡り合ったと私は感謝の気持ちでいっぱいです。

(2) 本日、第260回北社会

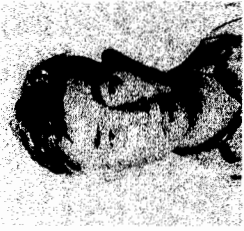
講師：阿部 孝氏 (高27回) IBMビジネスコンサルティング (株)

演題：「インターネット+携帯、安心安全な使い方」

一昨年・2月「ネットで変わるビジネス」、昨年・4月「進化する世界Web 2.0」に序で三回目の講演です。

食料自給率とギョーザ

日本の「食」と「農」について



坂本 進一郎

1941年仙台市生まれ。農業。県労農市民会議所所属。「一本の道」大瀧村。など著書多数。

か。

今世界の穀物在庫率は五十分を切ったといわれる。一九七三年、ニクソン政権の大豆輸出禁止措置で、日本の豆腐など大豆製品が値上がりして大騒ぎになったことを思い出す。現在の世界の穀物在庫の減少は、オーストラリアの干ばつに加えて、インド、中国をはじめ数カ国の小麦等の輸出禁止、あるいは輸出課徴金によって出回る穀物が少なくなったという構造上の問題がある。いずれこのままでは、食料輸入も突然止まるといことも考えなければならぬ。輸入一辺倒のわが国の食料事情は、危険水域に入ったとみていい。

それではどうすればいいのか。国家レベルではやせでも枯れても農業は基幹産業なのだから、まず農業、農民にそれなりの手当を払うことが必要だ。もう一つは、国民レベルの取り組みとして地産地消に目を向けるべきである。地産地消は広く日本国内を考えた方がいい。つまり、国民がもっと積極的に国産農産物を買うことである。ところが現状はどうか。農業軽視ははなはだしい。

今、農民は塗炭の苦しみの中にある。例えば、国のモデル農村といわれた大瀧村は、一戸あたり十五畝を有する大規模農家でありながら貧困窮している。昨年の米価は六十キあたり一万二千円まで下落した。この米価は三十七年前、私が人植した七二年当時の米価九千円に逆戻りしたようなものだ。

それではコストはどうか。一例を挙げれば、人植

は二百八十万円だったが、現在は五百万円もする。性能は確かに向上しているかもしれないが、農業機械にかかる経費は二倍近くに増えていることが分かる。これではいくら頑張ってもコストは下げられない。その結果、コストも一万一千円(自家労働等を含まない裸のコスト)ぐらいなので、一年間働いても何も残らないことになる。むしろ、生活費等の捻出がむずかしく、借金の上に苦しめられているのが現実だ。

政府の役割は国民の「生命と財産」を守ること。言い換えると、安全保障と福祉の二つをやることにあるといえる。八〇年代半ばの中曽根臨調の時、軍事予算と農水予算は三兆五千億円でほぼ並んでいた。その後、農水予算は削られ、現在は三兆円を切ったが、軍事予算は五兆円にもなっている。軍事が安全保障の柱であることは言うまでもないことだが、食料もまた安全保障の重要な柱である。今、国が早急にやるべきことは、先進各国が既に実施しているように、自家労働等を含む第二次生産費を入れたコスト並みの価格を補償する最低支持価格制度の採用、棚上げ(二二年くらい市場隔離し、役目の終わった備蓄米は家畜のエサや援助米に回す)方式への政策転換、それに店頭米袋の正確な表示を法律で義務付けるべきである。

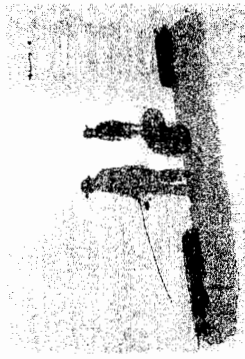
今の表示は大雑把すぎて、どんな米が混米されているかわからないので、初めから合法的に偽装表示を進めているようなものだ。これでは「食」の安全問題

私は十数年前、東京・深川の政府倉庫に保管されているミニマム・アクセス(最低輸入量)米と国産古米を見たことがある。その時、ミニマム・アクセス米はポストハーベスト農薬(収穫後にまく農薬)と思われる異臭、古米も何とも言えない異臭を発していた。これを一体誰が食べるのだろうかと思った。それだけでなく、店頭米袋にはくず米三、四十万くらいが混米されているともいわれる。

今は安全の問題に関心が高まっているが、こんなに窮乏になった世界の食料事情の中で本当に心配しなければならぬのは、小麦、大豆などの穀物が不足となる事態であろう。中国製ギョーザ中毒事件をきっかけに、農業の衰退が食料問題に跳ね返ることに思いをいたし、「食」と「農」について、考えるよすがとなればと願っている。

4年前、2004年3月17日、北社会第219回で講演した坂本進一郎氏(高11回)の真っ当な意見です。ご一読下さい。

文化



え・金子 義償 (日展・日洋会)